

AZ
653
!

陸軍軍備の充実と
其の精神

国立国会図書館



* 0056159000 *

0056159-000

AZ-653-1

陸軍軍備の充実と其の精神

陸軍省新聞班

1936

AJB

AZ
653
1

陸軍軍備の充實と其の精神

昭和十一年十一月五日
陸軍省新聞 並



AZ
553
/

孫子曰
百戰百勝非善之善者也
不戰而屈人之兵善之善者也

391



孫子曰
百戰百勝は善の善なる者に非ざるなり
戦はずして人の兵を屈するは善の善なる者なり

1028432

目次

序言

一	はしがき	一
二	軍備充實計畫の精神	三
三	ソ聯軍備の現状	一三
四	支那軍備の再検討	二六
五	國防上最小限度の兵力量	三五

目次

一

二

六	軍擴競争の限度……………	四一
七	何故今日迄本格的の軍備充實が出来なかつたか？……………	四三
八	軍備充實は戦争を誘發するか？……………	六五
九	軍事費と財政……………	七〇
一〇	軍備充實と庶政一新……………	八五

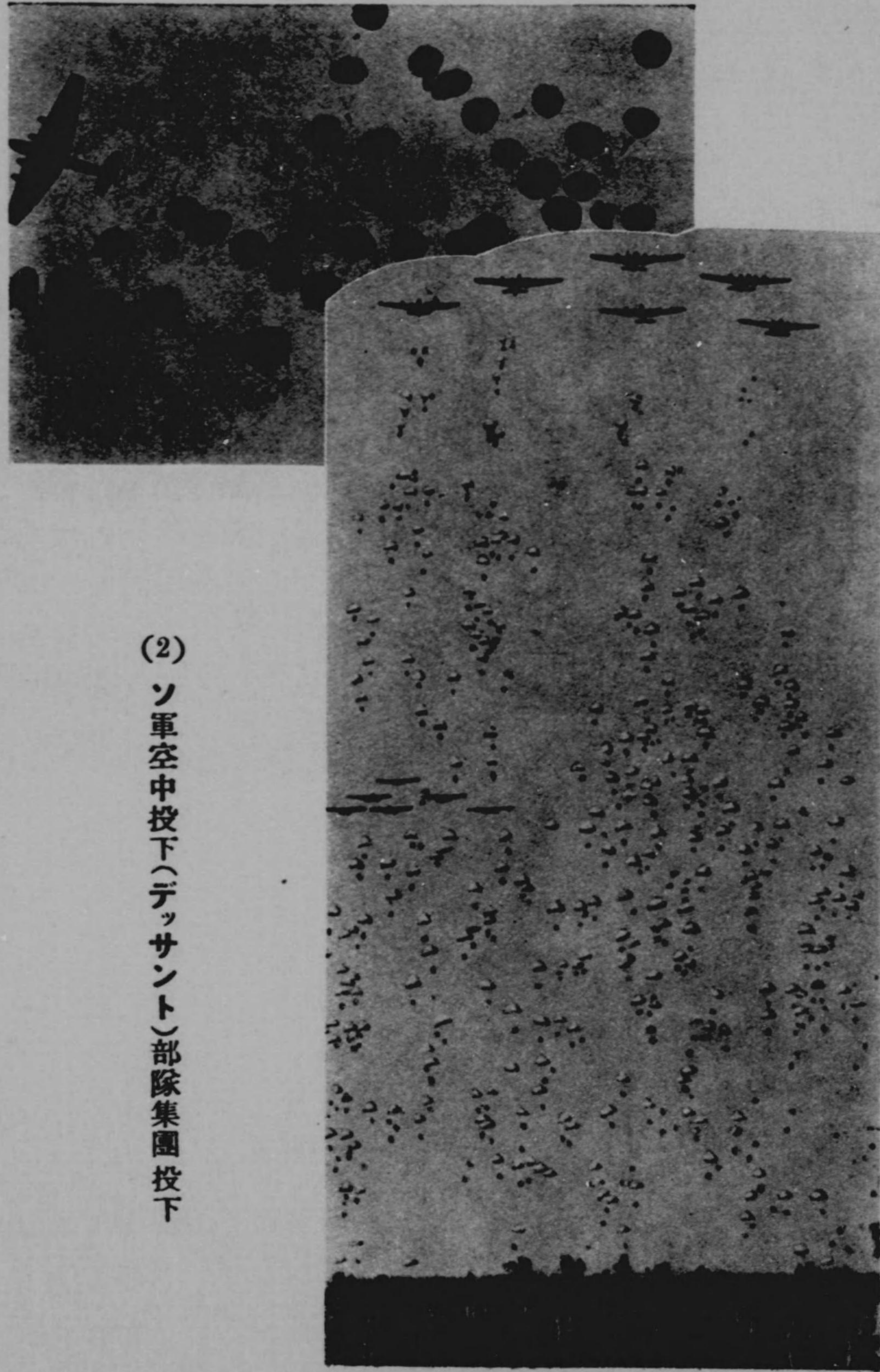
附 錄 昭和十一年度版「帝國及列強の陸軍」の抜萃—國防の本誌

附 圖 東亞の現勢

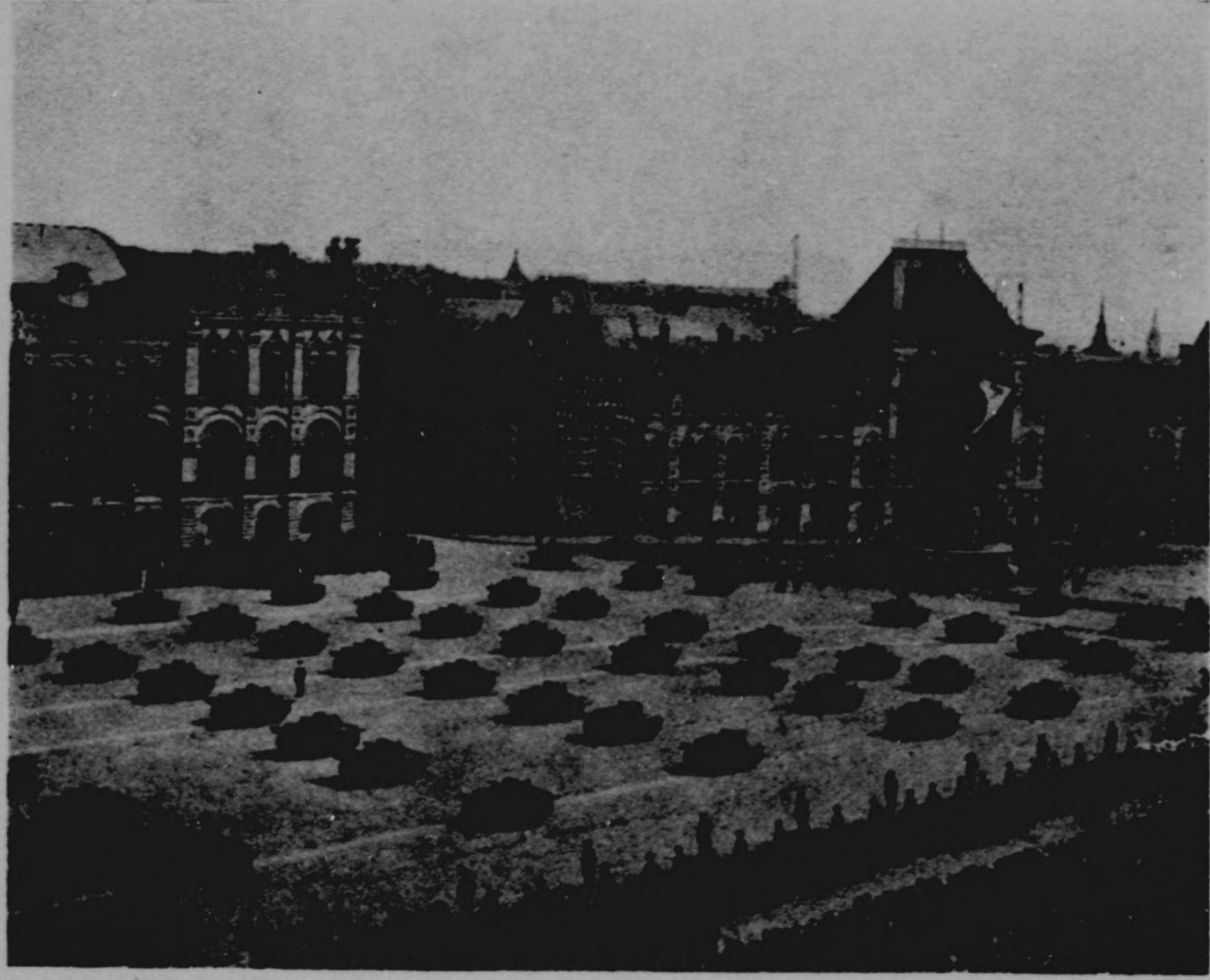
序 言

現下内外の情勢と我が國防施設の現況とに鑑み、陸軍當局に於ては從來の應急的彌縫的軍備を本格的に擴充し、同時に近代國防の要諦に合致せる國家としての内容を充實すべく庶政一新の斷行を要望し、舉國一致以て帝國の東亞恒久平和確保の重大使命の達成に邁進せんとするの決意を採るに至つた。

本書は右に關し、軍備充實の急務竝に之に關連し國民として一通りの認識を持たねばならぬと考へらるゝ諸點に就て、軍事の機密に觸れぬ範圍に於て忌憚なく卒直に所見を開陳したものである。素より斯かる重大なる問題の解説は、到底此の如き小冊子の克く盡し得る所でない。従つて所謂隔靴搔痒の感あるは誠に已むを得ない次第である。尙ほ本書と共に陸軍省刊行の「國防



(2) ソ軍空中投下(デッサント)部隊集團投下



(3)
ソ軍機械化部隊分列

陸軍軍備の充實と其の精神

一 はしがき

今や世界を舉げて未曾有の軍備擴張時代を現出し、國際的摩擦の白熱化する所、方に一觸即發の危機を包藏しつつある。實に現下の國際情勢を一言にして蔽へば、世界大戰の前夜を彷彿たらしむるものありといふべきか。非常時を口にするにせざるを問はず、何人と雖も此の儼然たる客觀的情勢に對しては目を蔽はんとするも徒爾であらう。

熟々現下の國際情勢を大觀するに、一面に於て現状維持國と現状打破國との對立あり、他面所謂人民戰線を標榜する自由主義乃至社會主義的國家と國

家主義を高揚しつゝある全體主義國家との相剋あり、此の雰圍氣の中に在つて各國は夫々自國の利害に従つて或は經濟的に或は思想的に、互に相排擠し互に相連衡し、其窮極する所何時戰禍の突發を見るやも圖られぬ情勢に在る。各國民の經濟的思想的生活の著しく國際性を帯び來つてゐる今日、一國のみ此の怒濤の圏外に晏如たることは不可能であり、世界の禍根は取りもなほさず直ちに我國の禍根であることを忘れてはならぬ。

我國を繞る國際情勢に就ては、既に屢々所見を發表した所であり又新聞に雜誌に論述し盡されて居る所であつて、今更茲に蛇足を加へる必要はあるまい。

要するに、今日の我國の對外的難局は、躍進に躍進を重ねつゝある我國力の發展、特に滿洲事變以來の國際的勢威の昂揚に伴うて、必然的に列強との

間に醸成せられた摩擦に基くものであつて、躍進國家の遭逢すべき當然の試鍊である。國防上より之を見れば、其の深刻さに於て其の規模の大きさに於て、彼の我國運を賭して戦つた日露戰爭當時の情勢よりも更に重視すべきものがあり、國民の奮起を要する今日の如く大なるはないのである。

今や國防上の責に任ずべき軍當局は勿論、政府に於ても現下時局に對處し、國防の安固を確保せんが爲には、如何なる障礙をも排除して邁進すべき不退轉の決意を持つに至つた。政府が今回國策の決定に方つて軍備充實を第一に採り擧げ、輿論亦之を支持しつゝあるのは、此間の消息を十分物語るものといふべきである。

一一 軍備充實計畫の精神

陸軍は今後約十數ヶ年に互る軍備充實の計畫を立て、之が實行の爲め相當巨額の豫算を要求する事となつた。何故に此の如き大規模なる軍備の充實が今日喫緊の問題となつたのであるか？此點は國民として齊しく知らんと欲する所であり、又十分なる認識と覺悟とを以て臨まねばならぬ所である。本問題を解く鍵は、一言にして云へば我國是と時局の重大性、並に我國軍備の實情に對する認識如何に在る。現下我が對外國策の基調が、新興滿洲國の健全なる發展を保障し、日滿支三國の完全なる提携を遂げ、國力の飛躍的増進と相俟つて東亞安定勢力としての確乎たる地歩を堅め、世界恒久平和に寄與せんとするに在ることは茲に喋々する迄もない所である。而して未曾有の重大時局に處し右の國策遂行を保障せんが爲め、海軍と共に我國防の骨幹たるべき陸軍兵備の現情は果して如何であるか、之を知らんが爲めには、世界に於け

る軍備の趨勢を検討し、我國現在の軍備が列強に比し如何なる地位に在るか
を認識し、更に隣邦就中ソ聯の對外政策並軍備の現状及將來の見透に對し、
國防上果して我が陸軍軍備は現状を以つて満足し得るや否やを攻究せねばな
らない。

我が陸軍軍備の現状が列強の水準に比し甚しく遜色あることは、我國が世
界大戰に直接參加しなかつた爲め、遂に今日に至るまで列強なみの近代的軍
備を十分整備するの機會を得なかつた事を想起すれば明瞭である。詳細の説
明は後章に譲り、茲では左表によつて列國近代裝備の概念を捕捉するに止め
度い。

尙ほ陸軍々備の趨勢と帝國陸軍の概觀に就ては陸軍省發行昭和十一年度版
「帝國及列強の陸軍」を参照せられん事を望む。

輕機關銃		區分	列國陸軍野戰師團裝備比較表
師團總數	步兵一隊當り		
約 三〇〇	約 三三三	蘇聯邦軍師團	
約 三二四	約 三三六	佛軍師團	
約 一、三〇〇	約 一〇八	米軍師團	
約 三一八	約 二六	英軍師團	

第二表

國	伊
萬 五 十 三 約	萬 五 十 三 約
機 百 五 千 約	機 百 五 千 約
(のもの屬所省軍空)	
氣球	○約飛行 中一行 隊二機
二中队	植海陸空 民軍軍直 地協協轄 軍同同隊 協隊部 同隊七 一隊一 ○五五〇
利 萬 千 四 億 八 約	利 萬 千 四 億 八 約
(度年六三一五三九一) (算豫省軍空)	
砲數 約 一四〇門	義勇軍に屬する 陣地高射砲司令 部地高射砲司令 砲數 約 二五
野戰高射砲聯隊 五	野戰高射砲聯隊 五
右裝甲自動車數 約 五〇輛	快速戰車大隊 右戰車數 約 二〇〇輛 右裝甲自動車數 約 五〇輛
	聯隊(六大隊)

國	獨	國	佛
萬 五 十 五 約	萬 五 十 五 約	萬 十 六 約	萬 十 六 約
(加増に萬五十七約く近)			
機 百 五 千 二 約	機 百 五 千 二 約	機 百 五 千 四 約	機 百 五 千 四 約
(のもの屬所省空航)		(のもの屬所省空航)	
飛行機 約 二〇〇中队	飛行機 約 二〇〇中队	飛行機 約 一三〇中队	飛行機 約 一三〇中队
		○乃至一六五中队となる。	○乃至一六五中队となる。
		植民地の分を合すれば一六	植民地の分を合すれば一六
		尙亞弗利加及ルバン其他の	尙亞弗利加及ルバン其他の
		外に氣球約一〇中队	外に氣球約一〇中队
		氣偵察球 三四五〇	氣偵察球 三四五〇
		戰闘擊 三〇〇〇	戰闘擊 三〇〇〇
		爆戰 三〇〇〇	爆戰 三〇〇〇
麻 萬 千 一 億 二 約	麻 萬 千 一 億 二 約	法 萬 千 五 億 四 十 約	法 萬 千 五 億 四 十 約
(度年五三一四三九一) (算豫省空航)		(度年六三一五三九一) (算豫省空航)	
不詳	不詳	砲隊 約 二〇〇門	砲隊 約 二〇〇門
機械化師團 三箇	機械化師團 三箇	四聯隊と若干大	四聯隊と若干大
		右戰車數 約 一、五〇〇輛	右戰車數 約 一、五〇〇輛
		裝甲自動車中队 約 二〇	裝甲自動車中队 約 二〇
		其他豫備戰車多數	其他豫備戰車多數
		右車輛數 約 二〇〇	右車輛數 約 二〇〇
		獨立戰車大隊	獨立戰車大隊
		植民地軍の戰車中队 約 三	植民地軍の戰車中队 約 三
		輕戰車聯隊(六中队) 一〇	輕戰車聯隊(六中队) 一〇

備考	野砲	戰重砲	銃關機重		平射步兵砲	曲射步兵砲
			師團總數	步兵一大隊當り		
一 師團内歩兵大隊數は蘇佛九、米英一二である。 二 本表の外、各國軍共、師團の外に強大なる重砲等を有するも、其等の數の師團に對する比率は不詳である。	(聯隊砲を含む) 三〇	二七	約 一二〇〇 (高射を含む)	約 二二	約 五〇 (對空・對戰車用を含む)	約 九
	最小限 三六	一六	約 一四〇	一六内外	一八	九
	輕榴彈砲 四八	二四	高射約 二七〇	一六内外	三二	四二
	一五四	一八	對戰車機關銃 約 二〇〇	一六内外	?	?
	一二		約 三〇〇			
			約 五〇			

次に世界赤化の國是を堅持するソ聯が、所謂近代的國防の本質を十分把握し、國政の根本を近代國防理論の上に築き、如何なる列強に比しても遜色な

き軍備を充實するに至つたこと、就中極東の兵備を増大し著々として東方への經略を積極的に進めつゝある狀況は、誠に驚異に値するものであつて、かかる隣邦と直接境を接し、而も建國の理想よりするも國是國策よりするも根本的に立場を異にする我國としては、斯る事態に直面した以上どうしても先づソ聯の軍備を主なる對象として軍備充實の目途を定めねばならない。

本件に關しては後に更めて述べる事にする。

次に何人も疑問を生ずるは、國際情勢の重大化と軍備充實の緊切なることは了解出来るが、何故軍は從來確乎たる永年に互る根本計畫に基いて軍備充實を爲すことなく、滿洲事變以來或は時局兵備改善案として或は昭和十年度からの航空防空緊急充備計畫として或は昭和十一年度からの作戰資材追加整備並兵備一部の改善計畫として將又今回の軍備充實計畫等々、遞次に恰も一

定の方針なき其場塞ぎの如き方法によつて軍備を充實せねばならなかつたかといふ點である。

是等の件に就ては以下項を追ふて説明する事とする。

三 ソ聯軍備の現状

今茲に述べんとする所は直接我國の軍備に影響を持つソ軍最近の對外政策、その尨大なる軍備並近代國防の要件を完備せる國防國家としての内容の充實の點である。右は決してソ聯就中ソ軍の強化を力説し國民に恐怖の念を興へ、その自信力を消磨せしめんとする爲めではない。「備あれば憂なし」の古語の如く、國民總がかりの努力精進によつて十分なる軍備を充實し、所謂國防國家としての内容充實するに至らば、ソ聯の積極的なる東方進出の政策

に對處し、我が國防の安固を期し戦争の慘禍を未然に阻止することを得べく、延て東亞の安定勢力として將又、世界に於ける指導的勢力としての我が躍進日本の前途を、十分保障し得る所以を十分認識して貫ひ度い爲めである。

從來ソ聯の軍備充實の實狀を紹介すると、やゝもすれば此の如き國と軍備の競争をしても到底勝算なきを以つて、寧ろ外交手段によつてソ聯の進出を阻止するを賢明とせずやといふ様な議論を爲すものがあるが、武力なく國力を背景に持たぬ外交は一片の口頭禪に過ぎぬことは、事實の明證する所であり、一片の條約によつて外國の侵寇を阻止せんとする事の不可能なることは、伊・エ紛争の生々しき經驗にても十分立證せられてゐる。

又我國民の國防に關する自信力の失墜は、延て我國の腕に抱かれて生長しつつある滿洲國民に不安の念を興へ、又友邦支那をして我を輕侮するの念を

生ぜしめる。此見地よりしても近代的國防の完成就中軍備の速かなる充實は、現下の國際情勢に於て最も喫緊の要事であると言はねばならぬ。

イ ソ聯の對外政策

ソ聯對外政策の根本基調が依然として世界赤化に在ることは言ふ迄もない。たゞ現在に於ては國內の各種の事情に制約せられて、一時一國社會主義の假面を冠つてゐるのに過ぎない。此間の消息は、去る九月十日獨逸ニユルンベルグに於ける第八回ナチス大會に於て、宣傳大臣ゲツベルス及黨外交部長ローゼンベルグ等の、ソ聯の陰謀及内情暴露の演説によつて十分窺はれる。要するにソ聯の對外政策の指向目標は西は獨逸東は日本であり、本年一月第二回中央執行委員會の席上首相モロトフ、陸軍次官トハチエフスキー等の言明せる所で明瞭である。以上の根本方針遂

行の爲め、ソ聯は歐洲方面に於ては佛國、智惠克と同盟し、英國始め歐洲列強と通商協定不侵略條約其他の協商を結び、以つて新興獨逸に對處する一方、東亞に於ては極東に勢力を有する列強と陰密に提携して、帝國の大陸方面に對する發展を阻止せんとしつゝ、在る。

以上の如き企圖の下に著々として軍備の大擴張と東西に對する政策の實現を進めてゐるが、彼の攻勢準備未だ必ずしも十全ならざる今日、直ちに帝國に向つて戦端を開くものとは斷ぜられぬが、我にして國防上の隙あらば假令直ちに武力戦に訴へない迄も、思想的に經濟的に何時にても之に乗じ來ることは從來の彼の態度に見て明らかである。況んや軍事上の見地に於て、必勝の確信を得たる曉に於て彼が如何なる舉に出づべきかは、彼の過去の侵略政策の歴史に徴し豫察するに難くないのであ

る。之が爲め彼は所謂和戰兩様の構へを以つて自己の威力を中外に示し、彼一流の思想戰的工作と相俟つて、漸次自己の勢力を東亞に扶植しつゝあるのである。

聯盟加入以來の歐洲外交の成功と極東軍備充實とに自信を得たる彼は、機會ある毎に威嚇的の暴言を吐き、滿ソ、滿蒙國境に於ては好んで事端を繁げからしめ、條約を無視して不法に越境し或は言を左右にして國境の劃定を拒み或は不意に我守備兵を襲撃して殺傷し或は祕かに滿兵、土民を使喚して反亂行爲に出でしめ、或は滿鮮人を拉致し、北洋に出漁せる我漁夫漁船を拿捕する等暴戾不遜の數限りなく、我正當なる抗議或は要求の如き殆ど一顧だにせられざる實情に在つた。

参考の爲めソ聯側の滿洲國內匪賊支援の狀況(第三表)及國境紛爭事件數

(第四表)を表示すれば左の通りである。

第三表

ソ聯側の匪賊支援狀況一覽表

(イ) (昭和十年度)

(昭和十年十二月調)

種類別	月別												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
入蘇援助		一		一						一			七
物質的援助	一				一	二		一	一		二		九
指導者派遣					二				一				三
武器供給	一	一		二	二	四	二	一	二	七	九	一	三三
合計	二	三	一	三	五	六	三	二	五	八	一二	一	五一

(口) (昭和十一年度)

(昭和十一年六月調)

種類別	月別											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
入蘇援助	一		一									
物質的援助				三								
指導者派遣			一									
武器供給	二			二	一							
合計	七	一	二	五	一							
計	六十七件											
計	一六	五	二	七	二							

備考

- 一 入蘇援助の欄に蒐録せるものは匪賊の蘇領遁入を收容援助したるものなり
- 二 本表に掲げたるものは物的證據あるものを摘記したるものにして本表以外に證據不十分のものは尙多數ある筈なり

第四表 滿洲國建國以來昭和十一年七月迄に於けるソ側不法行為一覽表

種類別	區分				
	東部國境	北部國境	西部國境	滿蒙國境	計
國境線侵犯	九	一	三	三	一六
不法越境竝拉致暴行	一三〇	七四	二二	二四	二五〇
河川上不法行為	二	九			一一
航空侵犯	二九	九	二	六	四六
合計	一七〇	九三	二七	三三	三二三

不法行為種類別一覽表

一方に於て此の如き國際的不信行為を頻發すると共に、他方ソ聯一流の宣傳を以つて、我を中傷し而も列強の監視の目の届かぬ外蒙、新疆、支那内部等に對しては著々として侵略の魔手を進め、遂に新疆とは通商

陸軍軍備の充實と其の精神

條約を締結して之を保護領化し、外蒙との相互援助條約を公表し、中國紅軍を使喚して漸次西域に據點を占め、山西に對する共匪の來寇を契機として北支及滿洲國に對して赤化包圍圈を完成したのである。

斯くて我國の、滿洲及支那との提携によつて赤化の東漸を阻止し東亞の恒久平和を招來せんとする國策と、ソ聯の東方政策とは全く茲に正面衝突を惹起したものと見るべきであり、廣い意味からすれば其の前衛戦は既に開始せられたとも見られるのである。

ロ 極東に於ける建設

レーニンは「世界赤化は東方に於て決す」と叫び最近某要人は「極東を以つてソ聯邦東方の城塞たらしむるに在り」と豪語してゐる。實に最近に於ける極東建設の規模の雄大なること、其進捗の迅速なることは、眞に

驚異に値するものがあり、東亞の政治的乃至經濟的地圖は今や全く面目を一新せんとしつゝありと云ふも過言ではない。

特に一言し度いのは、ソ聯の滿洲事變に對應する應急處置は大體昨年を以つて一段落を告げ、本年より雄大なる規模を以つて積極的に極東開發に邁進せんとしつゝあることである。

資金上より觀たるソ聯の極東に於ける經濟建設の規模は、全ソ聯第一次五年計畫の約六分一であつて、一九三四年より四年間に約九十億留を計上しあり、其重點は交通と工業とに在る。投下資本の増加亦急速であつて、一九三四、三五年各々十五億であつたものが三六年には一躍三十億に増加してゐる。

而して極東人口が總人口の八十分の一に該當し、その經濟建設の爲の

豫算がソ聯全計畫の六分の一である點より見れば、彼が極東を如何に重視してゐるか窺はれる。

極東建設の目的は

- 一 本國との交通連絡の確保
- 二 經濟的獨立性を與へ以つて尨大なる極東ソ軍に軍事的獨立性を與へんとすること

の二點であつて國防を主目的として居ることは申す迄もない。

交通及經濟建設の要領に就ては、本年三月十日の記念小冊子に詳述したから茲に重複を避けるが、一言にして言へば、鐵道は既にモスコより哈府に至る間複線工事完成し、本年末迄には浦鹽に至る全線完成すべく、ハム鐵道は既に測量を終へ一部支線工事に著手した狀況であり、數年な

らずして完成を見るに至るであらう。(延長千四百料のトルクシブ鐵道を僅々三ヶ年にして完成したことに想到したならば思ひ半ばに過ぐるものがある。)

かくてシベリア鐵道の輸送力は日露戰爭末期時代に比すれば數倍となり、戰時優に歩兵數十師團を基幹とするものを極東に派遣し之を補給し得る能力を與へるものと稱せられてゐる。

極東に於ける經濟建設は發電量全ソ聯の四六%を占め、一ヶ所のみで五十萬キロワットの發電所を有するアンガラ企業を始め、ペトロフスキー、ブレーヤ、コムソモリスク、ニコリスク、浦鹽等の諸企業を擧げ得べく、軍事建設に於ては、主要正面のトチカを主體とする築城は略完成し防空施設を整備し、兵營、飛行機根據地、油庫、爆彈庫、格納庫等

續々建築せられつゝある。(附圖参照)

食糧問題も、從來僅々百八十萬の住民に對してすら不足を感じてゐたが、今日では極東軍を加へて自給自足し得るのみならず若干の餘裕をも生じた様である。

ハ ソ軍の兵力

平時に於ける兵員約百六十萬(他に特別軍隊約二十萬を有す)、飛行機五千機、戰車五千輛であつて、内極東に在るものは、今や兵員約三十萬、飛行機約一千機、戰車一千輛内外に達してゐる。

其裝備は逐年改善進歩の一途を辿り、既に極東及歐洲接壤諸國方面の第一線軍管區の諸兵團は最優秀の裝備の整備を終り、目下第二線兵團の整備を急いでゐる。

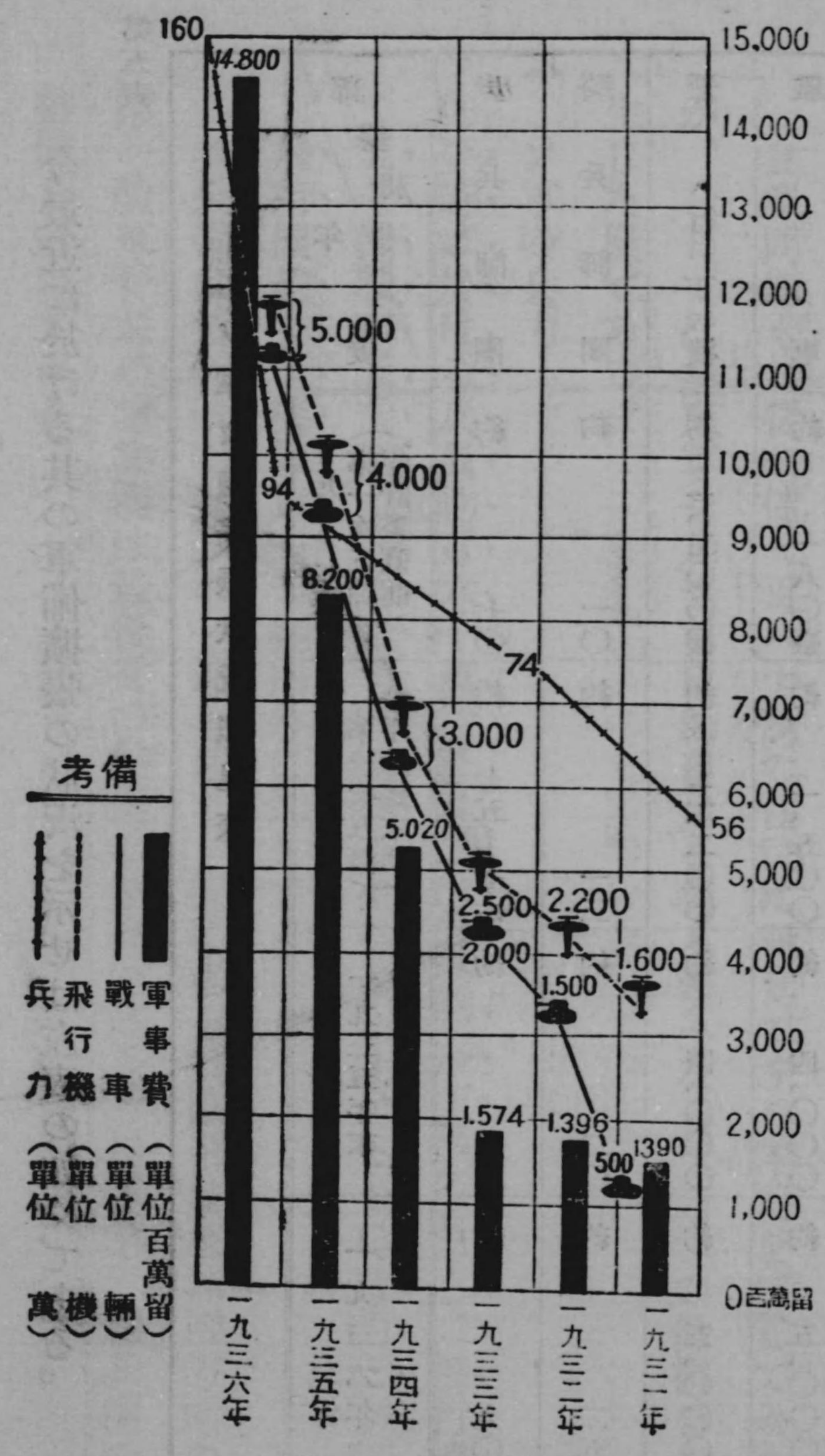
今最近に於ける其の軍備擴張の狀況を示せば左表の如くである。

第五表

部隊別	ソ軍々備擴張狀況概見表			
	一九二七年 (第一次五箇年計畫直前)	一九三二年末 (第一次五箇年計畫末期)	一九三五年末	一九三六年
步兵師團	約 七〇	約 七五—七六	約 八五	約 九〇
騎兵師團	約 一〇	約 一三	約 二〇	約 二五
飛行機	約 一、二〇〇機	約 二、二〇〇	約 四、〇〇〇	約 五、〇〇〇
戰車	約 一八〇臺	約 一、五〇〇	約 四、〇〇〇	約 五、〇〇〇

第六表

赤軍々備擴張概見圖



第七表

ソ軍現有兵力概見表

考 備	兵 團 別				方 面 別	
	飛 行 旅 團	獨 立 裝 甲 兵 團	騎 兵 師 團	步 兵 師 團	全 兵 力	極 東 兵 力
一 本年初頭以降更に極東の兵力増加しつつあり。	約	約	約	約	約	約
二 正規部隊は平時より戦時編制と同様の編成をとる。	五〇	一五	二五	九〇	約	約
三 徴兵適齡低下により得員の増大を圖りつつあり。	約	約	約	約	約	約
四 正規師團二六%民兵師團七四%なりしものを本年度より正規七七%民兵二三%に改編す。	八—九	三—四	四—五	一—五	約	約

陸軍軍備の充實と其の精神

近き將來に於けるソ聯軍備充實の豫想は茲に當局としての判断を記述する自由を持たぬが、歐米諸國の消息通の判断を綜合するに、平時總兵力には激増を見ることはあるまいが、飛行機、戦車は現有數の二―三倍となり各々一萬以上となる可能性あり、平時極東兵力も夫々之に伴つて増加すべきは勿論である。

従つて戦時極東に使用し得る兵力も、現在に比し著しく増加すべきは豫察するに難くない。日露戦争當時の交通、補給等の状態を以つてしても總兵力の約七分の三を極東に派遣した經驗を有することを考慮して、我方の採る可き對策を講ずることが必要である。

四 支那軍備の再検討

元來支那の軍隊は所謂軍閥の私兵であつて必ずしも統一せられたものでなく、殊に内蒙、新疆、西藏等の邊境地方は夙に獨立し若くは半獨立の状態に在り、其他地方に在つても軍閥にして反中央的意識の下に祕かに自己勢力の蓄存擴張に腐心してゐたものも尠くなく、従つて支那軍隊を見て直ちに之を近代國家の組織的の國防軍と同一視することは適當でなかつた。併し蔣介石の最近に於ける統一工作の成功により、反中央軍閥は概ね失脚し若くは懷柔せられ、之に伴ひ軍隊亦逐次に中央に歸屬して漸次國軍としての體裁を整へつゝある現況である。

支那軍隊の總數は二百餘師二百餘萬と概算せられてゐるが、軍隊の中央化により其大部を對外戦争に使用することが今や可能となりつゝあることを考慮しなければならぬ。而もこれ等軍隊が近時外國人教官の指導による練成

と、裝備の改善により漸次面目を更めつゝあるの事實は、南京政府最近の對日動向と相俟つて國防上輕視出來ないものがある。

尙航空兵力の充實に關しては、滿洲上海事件の經驗に鑑み「航空救國」のスローガンを掲げ米國其他の援助下に空軍の大擴張を行ひつゝある。中央所屬の空軍は上海事變當時陸上七隊水上一隊計百機に過ぎず、事變中は遠く逃避して覆滅を免れた程度であつたが、爾來蔣介石は銳意空軍の刷新、國民の航空熱育成に専念し、米國亦此機に乗じて南京政府と提携し航空三年計畫を建てしめ、先づ陸上七隊を改變して三隊とし、餘力を杭州飛行學校に集中して空中勤務者を再訓練すると共に、此地を空軍擴張の根據地として、爾後内容の充實に努め、尙ほ最近廣東空軍を改編せる結果、今や十四隊約七八五機（主として米國から購入したものであるが最近伊國の勢力の侵入が顯著である）

を保有するに至つた。而して是等飛行隊は主力を南昌に各一部を西安、成都、漢口等の要地に配置し、別に杭州（學生約四〇〇）洛陽（學生約三〇〇）に航空學校を置き學生の操縦、機關等に關する教育を行つてゐる。
現在の飛行機數は

戰	闘	機	一七〇
中	央	爆	擊
		機	二三五
		計	七八五
廣	西	偵	察
		機	二八〇
			八五五
			七〇

又南京政府は、昨年九月一般作戰計畫中に對日防禦計畫を策定し支那全土に互り大規模の防禦工事（附圖參照）を實施しつゝあるばかりでなく、之に伴つて盛に青年學生の軍事訓練、防空思想の普及及軍隊内に於ける對日作

戰準備教育等を実施しつつ、ある事は帝國として無關心なるを得ない所である。

殊に蔣介石が一面親日を唱へつゝ、他面黨部をして排日を行はしめ、延て今次の成都事件、北海事件、漢口事件、上海事件の如き不祥事件を頻發せしむるに至つた實情に在るを思ふ時、日支提携の遼遠を嘆ずると共に、對支國防亦輕視し得ないことを感ずるものである。而して支那の對日態度如何も彼が眞に我が實力と我國の眞意とを認識するや否やに關するものと考へられる。

又獨、伊等の投資に成る民間航空網の發達は眞に目醒しきものがあり、優秀なるダグラス機の堂々支那大陸の上空を飛翔する有様は、我國の民間航空の現状と對比し寧ろ自ら惘然たるの外ない。更に電話網及無線通信の發達は廣大なる支那各地を接近せしめ南船北馬の支那は今や昔日の支那ではない。此

點は我々として餘程認識を更めてかゝらねばならぬものがあると思へる。

更に共產軍は依然として陝西省北部及西康省附近に蟠居を續けてゐる。共匪が將來如何なる行動に出づべきや今遽に豫斷を許さないが、其背後に第三インターの魔手の動きある事實及共產軍の存在すること自體が、獨り支那の憂であるのみでなく滿洲國延ては東亞平和の爲大なる障碍であり、而も是等が再び北支方面に活動することゝなれば、北支、内蒙方面に於ける我權益を脅威するに至る可く、斯る事態發生せば我國としては自衛上斷じて黙視し得ない事となるであらう。

南京政府が經濟的、軍事的に共匪に對しては絶對有利の地位を有つに拘らず、之が徹底的掃滅を圖らない事は當然世界の疑惑をかう所以であつて、共匪と南京政府間に妥協説の生まれるのも必ずしも無稽の謠言とのみ否定し得な

いものがある。就中最近頻りにソ支密約説が流布せられ、又南京政府が對日國防工事を急ぎつゝある事實は、上海、平津地方を根據とし支那内部に深く潜入しある第三インターの活動と相俟つて帝國の對支施策上深く考慮を要する問題であり、特に有事の場合に想到すれば、現在の如き日支關係を以つてすれば、彼の動向は略々察せられるのであつて國防上看過し得ない問題であると考へるものである。

之を要するに、今日の支那は南京政府を中心として之を見る時は、必ずしも過去の如き國防上の無能力者でなく、國防上の觀點よりして再検討再認識を爲すの要がある。而して其背後にソ聯始め一・二列強の支援をも考慮せられるのであつて、此際帝國としては支那をして歐米依存の態度を棄て日支提携の必要を眞に了得せしめなければならぬ。而して現下の國際情勢に於て萬一

の場合を考ふれば陸軍に關する限りソ聯に對し國防の安固を期するばかりでなく、支那の戦力をも之を考慮に入れて置かねばならない。

五 國防上最小限度の兵力量

(一) 陸上兵力

以上の如く考察し來ると、我國の國防上大陸方面に對する防備は甚だ不十分であつて、戦争防止の爲めにも、有事の場合我が大陸の生命線確保の爲めにも、陸軍兵備の充實は極めて喫緊であることが了解出来る。

抑々國軍の所要兵力量は、國是及國家の現狀(地理的位置、資源等の状態)等の自主的立場に基く條件と關係列國の情勢即ち相對的環境に基く條件とより自から決定せられるものである。茲に以上の總てに亘つて詳述することは

出來ないが、最後の國際環境に包含せらるゝ隣邦の軍備に對する相對關係の一事に就て之を見るに、ソ聯一國を對象として考察して見ても、現在の我が陸軍兵備の充實が如何に喫緊であるか、窺はれるであらう。

即ちソ聯が戰時極東に使用し得る兵力を、列強の判定に従つて假りに數十師團、飛行機數千機とすれば、現在の我が兵備では、假りに我軍の訓練の精到、運用の妙、作戰の卓越等の精神的要素を加算しても數上の甚しき劣勢は補ひ得べくもない。

況んや將來戰に於ては、機械的乃至科學的の裝備が著しく重要性を加へたことを考慮する時は、所謂超大戰後型とも稱し得べき新式軍備の充實は眞に焦眉の急務と言はねばならない。

ソ軍の平時に於ける極東兵力は歩兵約十五個師團、飛行機百餘中隊（約一

千機）戰車約一千輛を算する。而も右の外、國境には攻勢の據點たるべき堅固なる築城を施して虎視眈々何時にても滿洲國に進撃し得る態勢にある。

之に對し我在滿兵力は兵數にして彼の約三―四分一、飛行機戰車に至つては數分の一の劣勢である。而も此の寡兵を以つて五千料に互る國境を守り、帝國に二倍し獨佛兩國を合した廣茫を有する大地域の治安を維持し更に一萬料に及ぶ鐵道の守備をも擔任せねばならぬ。又彼は滿蘇國境線に沿うて所謂戰略展開の形を整へてゐるのに反し、我は寡少の兵力を廣大なる全滿洲に分散して（我が關東平野を約一聯隊の兵力で守備するの程度）非戰鬪的態勢に在るのであつて、戰略上より見て此位危険な状態はないのである。

抑々滿鮮に配置すべき兵力は平時に在つては國境守備、國內治安維持、鐵道の守備等に任ずるは勿論、戰時に於ては外敵の進寇を阻止すべき重要なる

使命を有するものである。従つてその緒戦の勝敗は延いて戦争全局の興廢に重大なる關係を持つものであることを知らねばならぬ。現状の如く彼の半數にも充たぬ兵力を以つてして、國防の重責に任ずることは極めて至難である事は専門家ならぬ人でも了解出来ることであらう。

従つて在滿鮮兵力を充實して大陸の國防を堅め、戦時極東ソ軍に對して前衛的の任務遂行に遺憾なからしむる爲には、少くも、現在の極東ソ軍に對する我が兵力の比率を向上することが絶対に必要である。假令彼に優る我軍の能力を胸算するとしても、彼の極東に於ける平時兵力に略々均衡する兵數を要することは論を俟たぬ所である。

(二) 空中兵力

今後の戦争に於ては開戦劈頭敵國空軍は、我が首都並に重要根據地等に對

し爆撃を企圖する事を豫期せねばならぬ。

斯る企圖に對し對抗兵力を缺乏緒戦に於て一敗地に塗れんか、戦争は遂に立遅れとなり終始受働の態勢に立つの餘儀なきに至り、遂に敗戦の慘を見なければならぬ。従つて地上部隊の整備と共に空軍をして絶対不敗の實力を持たせる事が必要である。

空中勢力が近代戦争の重要因子たることは申す迄もないが、更に其の完備は陸海軍兵力の儼乎たる存在と相俟つて戦争防止の上にも重大なる役割を演ずるものである。彼の伊工紛争に際し、英艦隊が地中海に於て伊國を壓倒してゐたにも拘らず、遂に最後の手段に訴へ得なかつたのは、種々の理由があるが伊國空軍勢力の優越が與つて力ありしものと見る事が出来る。斯く考へ來たる時は我が劣勢なる空中勢力の擴充は刻下の急務中の急務と云はね

ばならぬ。

然らば幾何の空中武力を整備するかといふ問題であるが、航空機の移動性に鑑み、ソ聯の本國より極東に輸送して使用し得る兵力に匹敵する兵力を整備することが目標でなければならぬ。此兵力は彼の將來の擴張をも考慮する時は數百中隊に上る巨大なる數字となる。此の如き巨大なる計畫は茲數年間の計畫としては困難であるから、軍としては先づ最小限度の兵力の整備で満足し航空工業能力を培養し爾後は情勢に應じ準備するのが賢明である。以上の整備の爲めのみでも少くも現在兵力の數倍を要する事は明かであらう。尙ほ右の外約四千機に達する米國陸海軍航空勢力及支那の約八五〇機の空中勢力も亦考慮外に置くことは出来ない。

六 軍擴競争の限度

日ソ兩國軍備充實の結果は、極東に於て軍擴競争を惹起せぬかとは屢々發せられる疑問である。

勿論茲數年間は競争状態となるであらう。

併し極東の地形及交通網並資源の關係上、ソ聯が極東戰場に於て使用し得る兵力、之に對する後方の補給能力等には略々限度がある。

又西方にはフィンランドの四師、エストニアの三師、ラトビアの三師、ポーランドの三十師、ルーマニアの二十一師計六十一師と國境を隔て、相對峙してゐる。更に其後方に控えてゐる獨國の三十六師をも考慮に入れねばならない。又國內治安維持の爲めにも相當の兵力を充當せねばならぬとすれば、

ソ聯如何に強大なる軍備を有すればとて無限に極東に増兵する事は不可能である。

又ソ聯の産業發達せりと言ふも其能力には自ら限度があり、年々徴集し得る壯丁數にも限度があり、限りなき軍備競争は不可能である。

又彼が本國と隔つること遠く、而も人口稀薄極寒不毛の荒野を開拓するのと、我れが三千萬の人口と廣大なる沃土を擁する滿洲國を開發するのとを比較すれば、其難易は蓋し明らかであつて彼我の軍備に於て或は競争を惹起することあるとも、我れに毅然として邁進するの氣魄と實力とを有する限り何等危惧する必要はない。況んや右の如き軍備を一朝にして建設せんとするならば兎も角、今後十數年に互る計畫として日に月に進みつゝある我が國力就中財政經濟の状態を十分考慮に入れて立案せられたものであるから、國政の

運営宜しきを得ればソ聯との軍備競争に堪へ得ぬ様な虞は絶対にない。更に右と併行して廣義國防の見地よりして速に國力を最大限度に發揚し得べき體制を完成する必要のあることは勿論であつて、庶政一新の高唱せられる國防上の理由は實にこゝに在るのである。

七 何故今日迄本格的の軍備充實が出来

なかつたか？

これが本冊子に於て説明せんと欲する主題である。本件を十分理解せんと欲するならば、先づ日露戦争以來今日に至る陸軍軍備消長の歴史を一通り回想せねばならない。

今次の軍備充實の根源は遠く日露戦争直後の經營の挫折に胚胎する。

○日露戦後の軍備充實計畫

日露戦役後露國は著々軍備を整頓し、戦争直後には早くも九師團を増加して常備兵力を七十八師團とし、大正三年にはシベリヤ鐵道の複線工事概ね完成し極東軍の兵力を十一師團に増加し、我國は再び露國の脅威を感じるに至つた。

之に對抗する爲我も亦軍備充實の必要を痛感し、豫想する彼我の集中兵力及其速度並に作戰經過を慎重に審査して明治四十一年我平時兵力を二十五師團とする計畫を確定し、先づ四個師團の擴張を爲し大正四年更に二師團を増加して漸く二十一師團を整備し歐洲大戰を迎へることゝなつた。

○大戰直後の軍備充實

歐洲大戰愈々酣にして、戦局の變轉全く豫知し得ない情況となるや、我が

當局は從來の如く單一の敵國を對象とする國軍整備の方針では國防の責を全うし得ないと考へるに至つた。そこで大正七年平時二十二軍團（四十四師團）及要塞整備の案を立て寺内、原兩内閣は之に要する經費の支出を認め、原内閣當時に大正九年度より逐次本案經費支出實行すべく閣議決定を見たのである。これが實現されてゐたならば今日の如き國防の缺陷は招來しなかつたであらう。

然るに世界大戰の終了後帝政露國の崩壊したると陸軍裝備の趨向とに鑑み我國軍裝備の方針にも根本的の變化を齎すに至つたので、前述の兵數の擴張は一時之を放棄し、世界大戰の結果飛躍的進歩を來した裝備の改善を急務と考へ、大正九年新に四億八千六百萬圓の豫算成立し、前よりの繰越豫算と合し大正十年之を國防充備費として總額五億六千萬圓を以つて、大

正二十四年度迄の繼續豫算として兵器の改善、裝備の充實を行ふこととなつた。これが其後財政上其他の理由により繰延べに次ぐに繰延べを以つてし、節約に次ぐに節約を以つてするの餘儀なき狀況に立ち至つたのである。

○『大戰前型』軍備と『大戰後型』及現代型即『超大戰後型』軍備

世界大戰を契機として軍備は劃期的大變化を齎したことは周知のことである。即ち、火器の進歩、飛行機の發達、軍の機械化と科學兵器の使用とが其主なるものであり、世界大戰に参加した列強は、五年の久しきに互り國力を賭し、人力と金力との限りを盡して戰爭に従事し、悉く此の近代的の裝備を具備するに至つた。是等の新軍備は大戰終了後と雖も悉く其儘保有せられて今日に至つて居るのである。

参考の爲め、列強の大戰間使用した軍費を概示すれば

英	國	七一九億圓
獨	國	六六六億圓
佛	國	五七一億圓
米	國	四六一億圓
伊	國	一六一億圓

であつて、右の如き經費を投じて各々數百萬の大軍を建設し、之に悉く精銳なる近代的の兵器を具備せしめ、而して五箇年の大戰を實施したのである。之に反し我國は世界大戰に参加はしたと云ふもの、眞に國軍の一部に過ぎず、使用した經費も歐洲諸國に比すれば全く九牛の一毛に過ぎない。従つて大戰後に於て日本を除く世界列強は、悉く所謂「大戰後型」の軍

備と國家總動員の施設とを保有し、更に最近に於ては最新式の所謂「超大戦後型」の軍備を備へつゝあるに反し、獨り我國のみは「大戦型」の舊式軍備を、而も極めて不十分に整備しあるに過ぎず、此儘にて放置せんか、國防上重大なる缺陷を暴露する虞あるに至つた。

茲に於て取敢へず大正九年の資材整備費の成立となり大正十年之を國防充備費の一欸とした次第である。これが完成しても單に資材の彌縫的整備に過ぎずして到底歐米列強の程度の編制裝備に追及することは思ひも寄りぬ所であるが、辛うじて應急の需に應ずるの準備は不完全乍ら整ふわけであつた。

○軍備縮少時代の出現

偶々戦後の世界的不況の襲來と共に、我國家財政の状態は軍容刷新の爲

めの新なる經費の支出を困難ならしめ、一方戦争の慘禍を呪ふ平和論の擡頭、大戦中の好景氣時代に培養せられた國民の頹廢的氣分と、大戦後醸成せられた極端なる自由主義思想と相合流し、軍備縮少の聲漸く高まり、更に華府海軍軍縮會議成立の空氣に拍車を掛けられて、國を擧げて軍備縮少、軍費節減の要望となり、其極遂に第四十五議會に於て在營年限を短縮し、軍事費四千萬圓を節約するの建議案が議會に於て採擇せらるゝに至つた。

情勢此の如くであつたが、前述の應急的兵備改善は國防上絶對的の要求であるので、之が實現を條件として、出来るだけ軍事費の節約を圖り輿論に副ふこととなり、所謂山梨案として傳へられる大正十一年度の軍備整理が行はれたのである。

1 大正十一年の軍備整理

本整理實行の結果人員總數將校以下五萬四千、馬匹一萬三千、實に約五師團分の實勢力を整理縮少することゝなつた。我軍政史上未曾有の軍備整理は此くして行はれ、次いて行はれた大正十四年軍備整理(後述)其他數次の軍備、行政整理の結果と相俟つて、今回滿洲事變の勃發に當つては、國防上多大の不便に直面するに至り急遽應急の軍備充實を爲し、僅かに危機を切り抜けた様な次第である。

本整理に依つて歩兵二百五十二中隊、騎兵二十九中隊、砲兵百〇一中隊、工兵七中隊、輜重兵九中隊は遂に光榮ある我が陸軍から影を沒したのである。更に朝鮮歩兵聯隊增加人員、國境守備隊、歩兵聯隊增加人員、官衙學校等に互り極度の整理を行ひ、要塞整理費、國防充備費等の重要繼續費の節約繰延べを行ふ等、此等に依つて節約し得た經費は、

大正十二年度以降十一年間に三億五千萬圓の巨額に達したのである。

右の如き軍備縮少を行ふと共に、一方歩兵隊に輕機關銃、歩兵砲を裝備し少數の自動車牽引重砲隊を新設し、各兵種に通信、觀測器材等の僅少なる近代的裝備をなし、僅かに整理に伴ふ缺陷の補正を努むることゝなつたが、此の如き姑息なる方法では、到底十分其の缺陷を充足し、軍の近代化を爲し得べくもない事は云ふ迄もない。

之が爲め大正十二年度以降十三年間に互り、繼續費として臨時費九千五百萬圓を要求し、結局に於て大正十二年度豫算は前年度に比し三千萬圓の節約となつたのである。

以上の如く大正十一年には軍縮と共に、一方に於て軍備の刷新を企圖したが、此等の充實の爲めには、何分にも十三年の長年月を必要と

し、之では大戦後の駸々たる軍事の進歩に對し、到底世界列強の水準に追及し得べくもなかつた。

近代軍備に必須の航空隊の如きも、當時僅かに十數中隊に過ぎない貧弱な有様であり、戰車隊、高射砲隊に於ても全く獨立部隊すら之を持たず、化學戰裝備に至つては其研究施設すらない有様であり、況や將來戰の趨向とも謂ふべき國力戰——國家總動員——に應ずる爲めの青少年訓練の制度の如きは、全く考慮外に置かれてあつた始末である。

以上のものは、軍として其必要を認めなかつたわけではなく、財源を取得し得ない爲已むなく、緊急已むを得ないものに止め、他は後日に譲つて只管時機の至るを待つて居つたのである。

2 大正十四年の軍備整理

然るに大正十二年關東大震災の爲め國家は更に大打撃を蒙り、到底近き將來に於て軍の希望する如き裝備の刷新、施設の擴充に巨額の經費を仰ぐこと不可能なるを思ひ、此儘在再財政の恢復を待つて國防の缺陷を放置するより、寧ろ陸軍内部の整理統合によつて幾何かの財源を捻出し自給自足せんと決心したのである。然し前に述べた通り大正十一年度以降數次の整理削減によつて最早緊縮の頂點に達して居る爲め從來の陸軍の輪廓内に於ては到底整理の餘地はない。

そこで止むなく涙を吞んで武勳に輝く由緒ある團隊の一部を廢止して、之によつて捻出した血の出る様な經費を以て必要の最少限度の改革を斷行したのである。

此くして四個師團(師團數十七に減少す)及之に伴ふ部隊、輜重兵隊、

軍馬補充部の縮少を行ひ、既定國防充備費の一部を打切ることになつた。斯くて人員將校以下三萬四千、馬匹六千を整理し、經常費千七百五十八萬圓、臨時費千四百四萬圓を捻出し之を財源として、僅かに戰車二中隊、飛行十中隊、高射砲六中隊、照空隊二中隊、氣球隊一中隊、科學研究施設の改善を行ひ、辛うじて大戰末期の軍備に近似した程度のもので出来たのであるが、所謂「大戰後型」の近代的軍備と相去ること尙ほ遠遠なるものがあつた。

斯くして大正十一、十四年の兩軍縮を通算し、人員九萬、馬匹二萬に垂んとする多數の整理を爲したのである。財源取得の不可能なる窮餘の策として、國防の重要な要素たる數を減じ質の向上を圖らんとしたのであつて、質の向上によつて國防力を増加する一方數の減少に

よつて國防力を減殺せざるを得なかつたのである。

然るにも拘らず時の政治情勢は尙も軍事費の縮減を要求して已まず、已むなく再度の行政整理を行ふ外、所定繼續費の節約繰延べを行ひ、經常費七百五十餘萬圓、臨時費四千四百餘萬圓、合計約五千百五十餘萬圓の節約繰延を行ふの已むなきに至つた。

○滿洲事變前に於ける作戰資材の整備

大正十年度に於ける國防充備費の總額は約五億六千萬圓であつて、大正二十四年度即ち昭和十年度に互る十五ヶ年に整備する計畫であつた事は前に述べた通りである。

偶々大正八年原内閣當時、當時の國際情勢に對する必要上、海軍は八八艦隊を目標として此の大擴張を計畫し、陸軍亦二十五師團を目標として相

共に軍備の充實を企圖したのであるが、此の尤大なる陸海軍の軍事費を全部並行して大正九年度以降の豫算に計上することは、當時異常の好景氣に恵まれて居た時代に於ても頗る困難と見られて居た。

茲に於て時の高橋藏相と田中陸相及加藤海相と會同の席上、田中陸相は一般の情勢に鑑み繼續費取得の優先權を海軍に譲ることを決意し、海軍は直に八八艦隊の編成に著手し、陸軍の軍備充實は、後年度に至るに従つて増加する如くし當初は控え目にするこゝとなつた。是は當時の一般情勢上眞に已むを得ない措置であつたのであるが、今にして之を見れば、其後の資材整備並兵備の充實を遲滞せしめた原因の一を爲したものと見られるのである。而して當時協議した年度割で行けば、大正十七年(昭和三年)度から著しく増加して大正二十四年度(昭和十年)に於て大體其充實を完了す

る筈であつたのであるが、偶々財界の不況期に際會したのと、各般の情勢上豫算の繰延べ、或は削減となつて豫定の計畫を遂行し得ず、其結果昭和七年初頭即ち當初から十五年の三分の二たる十ヶ年を経過した時迄に於て、陸軍の使用した豫算は、當初の豫算に對し僅かに三割弱に過ぎないといふ驚くべき結果を招來するに至つた。

此くの如き結果となつた原因は

- 1 大正十一年軍備整理により大正二十四年(昭和十年)度迄の繼續豫算を大正二十八年(昭和十四年)度迄延長したること。
- 2 大正十二年關東大震災に遭遇し、繼續期間を更に大正三十年(昭和十六年)度迄延長したること。
- 3 大正十四年軍備整理によつて四師團を廢止すると共に、同年度以

降十年間に国防充備費千四百萬圓を節減する外、一億一千七百萬圓を後年度に繰延べたこと

4 昭和二年度以降、毎年財政上の考慮に基づく削減繰延の連続であり、遂に繼續費は空手形であるといふ觀念さへ生ずるに至つたと

5 昭和五年度豫算は、濱口内閣の金解禁の爲極端の緊縮政策を行ひ、五年度乃至十一年度豫算中から總額約三千七百萬圓を繰延べ、更に同年度實行豫算の際にも再び繰延べを行つたこと

6 昭和六年度に於ては約一千萬圓の節減と約四千萬圓の繰延べとを餘儀なくせられ、其一部は昭和十六年度迄延長せられたこと

以上の事實を回想したならば、滿洲事變前の我陸軍の軍備が国防上如何

なる状態に置かれてあつたか、略々了解せらるゝてあらうと考へる。

此の如き危険状態の儘滿洲事變は勃發したのである。

○滿洲事變勃發と應急對策——時局兵備改善——

昭和六年滿洲事變の發生に伴ひ、帝國四圍の國際情勢は急轉して軍備充實は一日も忽せにすることが出来なくなつて來た。十數年に互つて放棄せられてあつた資材整備を速かに補整し、非常時局に即應ずる應急の施設を必要とするに至つた。

前述の如く、資材の整備が遷延せられつゝあつた爲、第一線部隊の裝備中には其數の増加を要するものが少いばかりでなく、既に供用中の兵器中にも舊式に屬し更新を要するものが少くなかつた。

行軍中の軍隊が木製の機關銃を携行し、外國武官の目をそば立たせて居

た頃の事を想起するだけでも慄然たらざるを得ない。

茲に於て當局は、時局兵備改善案なるものを立案して、前述の如き国防上の大缺陷を補整することゝなつた。之が爲五億數千萬圓を必要としたが、財政上の都合により已むを得ず、国防充備費として大正十年度以降の既定繼續費の殘額三億數千萬圓のみを不取敢繰上げて之に充て、昭和十年度迄に應急の整備を行ひ、不足額二億圓は引續き別途に要求する事とした。

具體的内容を、茲に詳細に互り説明する自由を持たないが、要するに以上を以てしても、滿洲事變勃發より今日に至る陸軍々備の改善は資材の整備並に滿洲の治安維持の程度に止まり、所謂大戰後乃至は超大戰後型の現代的裝備と隔ること遙かに遠く、全く滿洲事變に伴ふ應急姑息の施策に過

ぎなかつた。従つて滿洲事件一段落を告げ茲に大いに國力の飛躍を遂げんとするに方つて軍備の根本的刷新を要するに至つたことは當然である。

更に又、滿洲事變を契機として滿洲國の獨立を見、日滿共同防衛の基礎確立し、滿洲國內外に互る防衛を帝國が負擔することゝなつたのであるが、滿洲國は廣袤實に七萬七千方里であつて帝國の二倍強、佛獨兩國を合したものでより大きい地域であり、陸地國境の延長實に五千軒(千數百里)の廣正面を以てソ支兩國に接壤してゐる。此の滿洲國の國防を擔任し治安維持に任じ、一萬軒に垂んとする鐵道の守備に任じ、極度に緊張した國際情勢に處し帝國の國防を全うする爲には、日清、日露戰役直後に於ける如く、相當大規模の軍備の充實を必要とするや論を俟たない。

○昭和十年以降に於ける補綴

前記時局兵備改善計畫を補綴する爲、昭和十年度から航空防空緊急充備計畫の實行に著手し、又昭和十一年度から作戰資材追加整備の爲、六ヶ年に互り四億圓を計上すると共に、五ヶ年計畫を以つて兵備一部の改善を實施すること、なつてゐる。

之を要するに日露戰爭以來の軍備消長の歴史は大體以上の如くであり、滿洲事變勃發と共に當然根本的計畫を樹立して所要の軍備を整備すべきであつたが、前途の變轉測るべからざる情勢であるのに鑑み、國力就中財力に相當の弾力を持たしめる必要もあつて、軍事費の増加も著しく制約せられ、眞に萬一の侵寇に對抗すべき彌縫的最少限度の軍備を以つて満足し所謂其日暮的に逐次兵備を改善するの已むなき實情に在つたのである。然

るに其後五ヶ年計畫の進展に伴ひソ國の國力の進展著しく其對外情勢有利に轉換し、軍備亦愈々擴張せられ、就中航空兵力及極東兵力に於て彼我の間に著しき懸隔を生じ、極東經略の飛躍的向上と相俟つて此儘に推移せんか、有事の日滿洲國の國境は彼の地上部隊の蹂躪に委し、滿鮮内地の大空は彼の空軍の跋扈に委するの外なきに立至るべき情勢となりつゝあるを看取した。

○新軍備充實計畫

茲に於て陸軍に於ては本格的軍備充實の計畫を立て萬難を排して之を斷行し、過去三十年に互る苦き經驗を繰返さざらむことを期し、昭和十年十二月以來之が具體案の立案に著手し、中途本年二月二十六日帝都に於ける事件勃發の爲累せられたが七月に到り漸く大綱の決定を見た次第である。

新軍備充實計畫は既述の如き帝國を繞る現下の國際情勢就中最近急激に表面化したるソ國の武力行使も敢て辭せざらんとする積極的東方政策に對し、軍備の均衡に依つて戰禍を未然に阻止し、克く日滿兩國共同防衛の實を保障し、東亞永遠の平和を確立すべく恒久性軍備を建設せんとするに在る。

其骨幹たるべき大綱を擧げれば

- 一 航空兵力の増強
- 二 在滿兵備の増強
- 三 右二項に應ずる補充、教育、動員、補給等の軍政的諸施設の擴充
- 四 作戰資材の整備

以上の實行は概ね十數年計畫とし緊急重要な事項は其前半期に於て實現

を期するに在る

八 軍備充實は戰爭を誘發するか？

軍擴競争の窮極は戰爭なりとはよく耳にする言葉である。然し戰爭の原因は軍備競争にあらずして當事國間の利害の衝突であり、國策の對立相剋である。戰爭惹起を豫想せしむる様な原因存するが故に軍備を準備するの必要を生じ、國際關係白熱化し、外交手段を以つて紛争を解決し得ざるに及んで遂に戰爭となるのであつて、戰爭を避けんと欲すれば、其の根本原因を除去するか、戰爭誘發を阻止するに足る強力なる軍備を備ふるかの二途あるのみである。

日ソ兩國の互に軍備を充實するは、各々兵力を以つても擁護せねばならぬ

利害なり國策の背馳あるが故である。彼が赤化政策と極東進出の企圖を放棄せぬ限り、又我國が東亞安定勢力たるの立場を放棄せぬ限り、永遠に日ソ間の妥協は成立し得ないであらう。我國が東亞の重鎮として將た又安定勢力として東亞平和維持の全責任を自ら負擔する以上、他の如何なる外壓に對しても之を阻止し得る實力を具有せねばならぬは當然であり、眞に東亞平和の爲め將又我國及滿洲國存立の爲め已むを得ざる場合に於ては、自衛上武力の行使をも敢て甘受しなければならぬ場合あるは勿論覺悟の前である。

若し毅然として我が國是を貫徹するの氣魄と實力とを具へることが出来なければ、宜しく我國は積極進取の國是を放棄するに如かずである。

國策なり利害なりが相反する兩國對立しある場合、兩國間の實力均衡を失する時に戰爭勃發の危険がある。

換言すれば、兩國間の國力相均衡し、互に他國の實力を正當に認識し評價し之を畏敬する間は決して戰爭は起らぬものである。一方國が他方國に對し確實に勝算ありと感じたる時戰爭勃發の可能性が生ずる。明治三十七、八年の日露戰爭も露國要路の人々の我陸海軍に對する戦力の判断を誤り、日本與し易しとの判決を得たる爲遂に開戦の決意をとるに至つてゐる。

右の見地で現下の日ソ關係を眺めたらどうであるか？

彼我の兵力果して均衡を得て居るであらうか？

我國と國是國策の相反する彼にして欲するならば、何時にても戰爭を開始し得る姿勢に在るのである。我國が度重なる彼の挑戰的言辭、彼の挑戰的態度、國際的不信に對し隱忍自重して居ればこそ戰爭を防止し得て居るのであるが、若しソ聯が尊大不遜飽く迄傲慢なる態度を繼續するならば、今後如何

なる不祥事が惹起せぬとも限らないのである。

以上にて大體明瞭なる如く我が陸軍が軍備を充實するのは彼我兵力の均衡を保持し、戦争の慘を避けんとするに在る。一部人士の抱懐する如き危惧は眞に杞憂である。況んや大義を宇内に顯揚し皇道の宣布を以つて國是とする帝國が、進んで戦争を挑むが如き霸道的行動を採る事は古今を通じて絶対にあり得ざる所であると斷言して憚らぬ。(附録、昭和十一年度版「帝國及列強の陸軍拔萃」参照)

尙ほ戦争を避けんが爲め外交工作に多大の期待を懸ける場合があるが、外交は素と國力の反映であり、力なき外交は一片の社交に過ぎないことは史實の明證する所、力なくして外交のみに依らんことの愚は伊工紛争に於ける工國の悲惨なる運命を指摘すれば足る。即外交に依る平和維持工作の成果を擧

げんが爲めにも、先以つて軍備の均衡を得なければ之を庶幾し難いのである。

戦争が國力戦化せる今日、愈々開戦となれば一日の戦費少くも五千萬圓を要すべく(世界大戦の統計による)一年間百五十億乃至二百億圓を要するものと見ねばならぬ。勝つも敗けるも此だけの経費は雲散夢消するのである。のみならず人命を損し、文明を破壊し、國力を消耗し、其害毒の及ぶ所圖り知るべからず。一ヶ年十數億や二十億の軍事費を支辨することによつて兵力の均衡を得、戦争の慘禍を未然に防止し得るならば、是程幸福なことはない。「軍費は國家の保険料なり」とは實に穿ち得たる至言といふべきである。

九 軍事費と財政

國際情勢が平靜であつて、國際間の摩擦の小なる時には、若し事情が之を許すなら、軍事費は成る可く小なることが望ましい事は申すまでもない。之に反し國際不安大であつて、國防上大なる危険を感じる場合には、萬難を排して軍備を充實し、國家を安泰ならしめ國策遂行を容易ならしめる事の必要なことも亦當然である。唯、茲に特に留意を要するは、軍備は恒久性を有するものであつて、茲に一個師團を新設した場合に就て考へて見ても此の師團が完全に戦時の編制と得員とを充足せんが爲めには相當の長年月を要するのである。従つて平時より有時の場合必要の軍備を具備しなければ、國家の危急に際し之を急造せんと欲してもそれは不可能であることを銘記せねばならぬ。

又軍備には一國の國是、地理的關係、國情等よりして自主的に決定すべき部分即絶對軍備と國際情勢に即應せしむべき部分即相對軍備とがあり、現在の如く我國策遂行に密接な關係のある列強が、競うて軍備擴張を行ひ巨額の經費を支出しつゝある場合に於ては相對的に軍備を強化する必要を生ずるのは當然であつて、我國のみ獨り軍備の負擔から免れやうとしてもそれは不可能なことである。

最近に於ける列強軍備擴張の情況は

- 1 ソ 國 正規兵九十萬を百三十萬とし民兵其他を合すれば百六十萬に達する。最近ソ軍が如何に軍備擴張に狂奔しつゝあるかは左に掲げた軍事費増加の狀況及前掲の第五、第六表によつて十分之を窺うことが出来る。

- 一九三一年度 約 十三億九千萬留
 一九三二年度 約 十三億九千六百萬留
 一九三三年度 約 十五億七千四百萬留
 一九三四年度 約 十七億九千五百萬留(實施は五十億二千萬留)
 一九三五年度 約 六十五億留(實施は八十二億留)
 一九三六年度 約 百四十八億留(ゲベウ豫算を合せ百七十億留)
- 2 獨 國 **ヴェルサイユ**條約規定の歩騎兵十個師團十萬より歩騎兵及機械化計三十六師團五十萬に擴張し、更に一年在營制を二年に改め常備兵員七十五萬を算するに至る。
 軍用飛行機は零より二千五百を裝備するに至る。
- 3 奧 國 **サンゼルマン**條約規定の兵力三萬より八師團七萬、飛行機三百機に擴張した。

- 4 米 國 未曾有の豫算成立と共に本年七月以降約十四萬の正規軍を十八萬に十九萬の護國軍を二十一萬に千七百機の陸軍飛行機を二千三百機(二―三年間に)海軍飛行機約千機を約二千機(數年後)に擴張しつつある。近年に於ける陸軍豫算の増加を見れば軍備擴張の狀況は一目瞭然である。

一九三三―三四年度	二億八千萬弗
一九三四―三五年度	三億四千六百萬弗
一九三五―三六年度	四億二千二百萬弗
一九三六―三七年度	五億七千三百萬弗

- 5 英 國 空軍の擴張著しく其増加の狀況は左の如くである。

一九三六年完成 九四中隊
 一九三七年完成 一七二中隊
 一九三九年完成 一九二中隊以上

かくて一九三九年には第一線二千四百機以上豫備機略同數となる。

6 佛 國 一九三四年兵力五十六萬飛行機約三千であつたものが一九三五年には兵力約六十萬飛行機約四千五百に達した。

以上は最近に於ける列強の軍備及軍事費増加の狀況を概説したのであるが、軍事費の嵩む原因は勿論現下世界に於ける國際不安に基くものであるが、更に軍の近代化に伴う兵器材料費の増加をも原因の一として擧げることが出来る。試みに我國の例に就て之を見るに五年前と今日との主要兵器の單價に就て比較して見ても、現在は往時の約二倍乃至三倍以上に達して居るのであ

る。二三の例を擧げて見れば山砲は昭和六年頃四千圓であつたものが、現在の新式山砲は約一萬二千圓となり、野砲は約一萬圓（大正十年頃は約八千五百圓）より約一萬七千圓、野戰重砲は約三萬圓（大正十年頃は約一萬六千圓）より約三萬五千圓となつてゐる。

更に飛行機は約三萬圓の小型が約六萬圓に、約六萬圓の中型が約十二萬圓に、約十六萬圓の大型が三十萬圓以上となつてゐる。

僅々數年間に兵器の價格が殆ど二倍内外に達してゐるのは、科學の進歩と共に兵器の性能が日進月歩であるによる。就中飛行機の如きは數年前に於ける戰闘機の最大速度百八十杼高度五千米迄の上昇時間約三十分常用高度約二千米であつたものが、現時に於ては最大速度四百數十杼五千米迄の上昇時間五分以内常用高度四千米以上が要求せられる様になつてゐるのである。

又専門家以外の人がやゝもすれば閑却し易いのは、大砲か機關銃即兵器材料が整へばそれで戦争準備完了せりと考へることであるが、實は素人の氣の附かない豫想外に多額の經費を要するのは彈藥費と輸送補給資材とである。愈々戦争となつた場合作戰上に支障なからしめる爲めには、少くも全軍の數會戰分の彈藥を準備しなければならない。

世界大戰の經驗に徴し、我全陸軍一會戰分の彈藥費を計算すると、概算二三億圓を要するのであつて、是によつても近代軍備の爲め軍事費の如何に多額を要するか、察せられると思ふ。

而して此彈藥を平時より何會戰分を準備すべきかは、作戰の規模と當時の軍事工業能力に關するものであつて、工業力發展せる國に於ては此の經費は節約し得る理屈である。茲にも國防の體制を整へることの急務である理由が

あるのである。

次に軍事費に就て常に問題となるのは不生産的であるといふ點である。成程軍事費は本質的には生産的のものではあるまい。併し現在の如く機械が著しく發達し工業が合理化せられて一般に生産過剩の状態に在り、物貨の生産制限をせねばならぬ様な時代に於ては、軍用物件の製造は工業力を保持し繁榮せしめる爲不可缺の要件であり、之によつて景氣を好轉せしめる事が出来るのである。現在陸海軍にて年々消費しつゝある數億圓の軍費を即時停止したと假定した場合、我國の經濟状態が如何なる運命に陥るかを想像して見たならば、少くも現時に於ては軍事費の如何に生産的效果を發揮しつゝあるか、了解せられるであらう。又過去に於ける我國工業發達の歴史を回顧して見ても、軍艦の建造が如何程造船業の發達に寄與したか、又兵器の製造が如

何に我重工業の發展を促進したかを思ふ時、軍備の經濟界特に工業界に及ぼす影響は實に甚大なるものがあるのである。更に又直接に或は商工業を介し間接に農村を潤ほす効果も大なるものがある。現に直接的には陸軍のみでも年々數千萬圓を農村に落しつゝあるのである。此點に就ては紙面の都合で詳述し得ないのを遺憾とする。

更に國民として考へねばならぬ事は、軍費の嵩むことは軍需品材料を外國に仰がねばならなかつた時代に於ては、極めて危険なる事であつたに違いない。併し現在に於ては、陸軍に於ても海軍に於ても、殆ど原料の大部分を國內に仰ぎつゝあるのであつて、我國の産業發達の助成とこそなれ、絶対に之を脅威するものではないのである。

次に軍事費と一般國費との比率の増減は、一に當時の國際情勢と軍備の實

情如何に關するのであつて、現在の如く國際的危局に遭遇し、軍備内容に多くの缺陷を包藏する場合、軍事費が嵩むことは、國家の存立上眞に已むを得ない事態であると考ふべきである。

即ち、軍事費の過大なりや否やは、其の時機に於ける國防の實情に基いて批判さるべく、單に數字的に見て云爲さるべきものではない。況や軍事豫算の一般豫算に對する比率を捉へて、列國のそれと比較して大小を論ずるが如きは、國防なるものに對する理解を持たぬものであるばかりか、其の試み自体も亦次に述ぶる如く、全く意味を爲さぬことなのである。以下軍事費と總豫算との比率に依つて、各國の夫れを對照批判することの不合理なることに就て一言する。

周知の如く各國の豫算編成法は全く區々であつて、或る國で總豫算中に計

上せる費目も、他國では之を除外して居るものもある。他國では總豫算中に計上せるものでも我が國に在つては之を特別會計として除外せるものもある。例へば、所謂四割六分とか四割八分とかいふ我が國軍事費の比率計算に於ては、總豫算額に特別會計を含ませて居らぬが、實は我が國には、三十數個數十億圓（財務當局の發表した豫算統計額に就て見るときは昭和十年度は約六十九億圓に達する）に達する特別會計があり、之に對し軍事費の比率を計算すれば一割三分に過ぎないこととなるのである。

又軍事費其物も之を定義づけることは仲々困難であつて、國により其の解釋は區々である。而して從來我が國では軍事費即ち陸海軍省の經費といふ様に考へるものが多いのであるが、之は甚だ認識不足といふべきである。即ち豫算面だけで論じて、外國では植民地の軍事費は悉く植民省の豫算として

居る國がある（例へば英、佛、伊）。又自治領の軍事費は自治領の豫算に計上して本國の豫算外として居る國がある（例へば英國）。更に失業救済に名を藉り軍需工業に尨大なる經費を流用して居る國がある（例へば米國）。又軍事費の一部を地方費負擔とせる國もある（米國）。其他仔細に検討すれば此の如き例は枚舉に遑ない程である。

従つて斯くの如き國と軍事豫算を比較せんとすれば、我が國に於ても滿洲事件費は軍事費より除外し、又臺灣、朝鮮に於ける軍事費は之を本土の夫より除外し、且又臺灣、朝鮮、樺太、關東州等の特別會計豫算の如きものは、總て一般豫算に加へ、然る後之を國家總豫算として軍事費との比率を算定すべきである。

殊にソ聯邦の軍事費の如きは、其の内容の不明にして真相を捕捉し難い點

に於ては、其の最たるべきものである。即ち莫大なる軍需工業費を含まないのは勿論、兵營の建築、射撃場の設備の如きものは地方費の負擔とし、其の他國防飛行化學協會等各種團體から強制的に軍事費一部の獻金をなさしめて居るが、是等除外せられた額は莫大なる金額に達して居る。而も尙責任ある當局より公表せられた兩三年來の軍事費の驚くべく巨額に達してゐることは既に述べた通りである。

列國の軍事費と總豫算との比率を比較することは前述の如く意味を爲さないが今試みに、純計計算による我が國の軍事費の比率を、列國の夫れと對照すれば左表の通りである。

(註) 勿論本表は必ずしも正鵠を得て居るとは云へないが、純計計算によれば、我が國の軍事費は表記の諸國中最下位の部類に屬することがわか

る。即ち統計のとり方如何に依つて結論は如何様にも導き得ることが了解出來よう。

第八表

昭和十年度純計豫算總額と國防費との比較表

國別	區分	歳出總額	國防			計	總額に對する國防費の%
			陸軍費	海軍費	空軍費		
日本		七、八七〇、九七〇 <small>千圓</small>	四、九二九、九五九	五、九七七、八四〇	一、〇三三、七四三	二二・九	
英國		七、九九七、〇〇〇 <small>千鎊</small>	四、三三〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	二、〇六五、〇〇〇	二七・〇	
米國		七、六四五、三〇二 <small>千圓</small>	三、八九〇、〇〇〇	五、八二八、〇〇〇	一、〇三八、七五五 <small>其他</small>	三三・八	
佛國		四、七八七、〇二二 <small>千法郎</small>	五、六六六、〇〇〇	二、九二九、〇〇〇	一、四五〇、五〇〇 <small>其他</small>	三三・三	
伊國		一、九六五、六六七 <small>千圓</small>	二、四九二、三〇〇	一、〇九五、九七三	八九九、六〇五	三三・七	

尙之を各國民一人平均の負擔額により比較すれば次の通りであつて、強て

陸軍軍備の充實と其の精神

比較すれば之亦我が國民の負擔は列國に比して最下位に在るとも謂へるのである。

第九表

國名	分區	軍事費	一名當負擔 (邦貨換算)
日	本	一、〇二二、七四二千圓	一一圓
英	國	一二四、二五〇千磅	三九圓
米	國	一、〇三八、七五五千弗	二五圓
獨	國	八九四、三二三千麻克	一九圓
佛	國	一〇、六二二、七〇〇千法	一〇〇圓
伊	國	四、三九四、三八七千利	三〇圓

一〇 軍備充實と庶政一新

以上を以つて我國の直面せる國際情勢並に、之に即應する軍備充實強化の必要に就て述べた。

國防の本質に就ては既に昭和十年小冊子「國防の本義と其強化の提唱」中及昭和十一年度版「帝國及列強の陸軍」に詳述してあるが故に茲には繰返さぬが、今後の戦争は國力戦であり、戦争の勝敗は獨り武力戦のみによつて決するものではない。武力戦は戦争の主體であり、武力は國防力の中核であつて武力の充實が國防上第一義的のものであることは勿論であるが、武力と同時に綜合國力の充實を圖らねば龍を畫いて睛を點ぜざるものである。

即今後の戦争は武力戦、經濟戦、思想戦等が合體して綜合的の國力戦とし

て展開するのであつて、就中思想戦は之によつて遂に敵國を内部より崩壊し戦意を放棄せしめ、以つて一舉にして戦争を終結に導くだけの働をなすものである。經濟戦は貿易戦資源戦更に經濟封鎖によつて經濟的に相手國の死命を制するものであり、之亦武力戦思想戦と共に有力なる戦争手段である。

以上の綜合國力戦の勝者たらんが爲めには、國家の全智全能の一元的發揮が不可欠の要件であり、之が爲めには平時より國防體系が完成してゐなければ到底其の機能を發揮することは出来ない。今日庶政一新の高調せられつゝあるのは、一般政治的見地に於て從來の利己的個人主義的施設、自由主義的政治、行政が行詰りを來し更始一新するにあらざれば、國家の躍進繁榮並に國民全體の幸福を庶幾し得ない情勢となりつゝあるに因るのであるが、他方國防的見地より見れば、庶政一新は日本精神を基調とし近代國防の要諦に合致せ

る全體主義的國家の體制を整備し、國力の合理的運營發揚を庶幾せんとするに存する。

従つて國防の見地よりして、平時に於ては發動せざる力であり有事の日武力戦の手段たる軍備の充實と、廣義國防の根基たる庶政一新とは不可分一體關係に在るものであつて、今回の軍備充實と併行して軍が庶政一新を要望しつゝあるは誠に故ありと言ふべきである。

兩者の爲め必要とする經費は國民隊薪嘗膽するとも之を捻出するの決意が絶対に必要であり、之無くして我國の國防全きを得ず國家の躍進亦期するを得ないのである。

附 録

昭和十一年度「帝國及列國の陸軍」拔萃

我が國防の本義

近時國際情勢の異常なる紛淆に伴ひ國防思想の翕然として昂揚せられ來りたるは眞に欣快の至りであるが、而も尙我が國防の任務を以て單なる國土の防衛乃至は國家現勢の維持位に解し去る向の未だ必ずしも尠しとせざるは甚だ遺憾である。抑々我が國が天壤無窮なる 寶祚の隆昌と共に永遠無窮に發展し行くべき國であり、國民が昭々乎たる 御稜威の下に 皇運を扶翼し奉りつゝ代々相傳へて伸展し行く國であることは今更申す迄も無い所であるが故に、我が國の此發展を阻害せんとするあらゆる制肘壓迫を排擠して以て皇國日本の無窮に彌榮なる發展を遂げしむるは、實に我が國防の重大なる任務であると謂ふべきである。世上往々國防なる字義の消極的語韻に惑はされて我が國本來の發展性を没却し、國土の防衛乃至は國家現勢の保全のみを以て我が國防の能事終れりと爲すが如きは甚だ盡さざる見解である。

然り而して、我が日本の發展はもと我が肇國の精神の具現に外ならず、從て敍上の任務を有する我が國防の精神が亦肇國の大精神に依て一貫するものなるは言ふ迄も無い所である、八紘一宇、億兆をして皆其處を得しめんと、聖旨に拜察し奉る此大精神は、聽て世界全人類の福祉を齎す所以のものであつて、かの自己の生存の爲に他を排撃して顧みざるが如き歐米諸國の利己的、霸道的國防とは其の精神の根本に於て自ら異なる所在を知らねばならぬ。

要するに、我が國防の本義は、單に我が國土を防衛し我が國の現勢を維持するのみならず、天壤無窮の皇運を扶翼し奉りて我が日本の無窮なる發展を遂げしめ、依て以て自ら世界全人類の福祉を齎さんとするに在りと謂ふべきである。

世界の現状と國防力綜合強化の要

變つて現下世界の情勢を觀するに、各國の利害錯綜し國家對立の尖鋭化せること眞に甚しきものあり、假令正義の主張と雖、背後に之を支持するの實力無くしては容易に貫徹すること困難なるの狀態を現出して居る。從て、國防力に自信無き國は其主張を貫徹するに由なく常に不利なる地位に壓縮せられて國運の隆昌は遂に期すべくも無いこととなるであらう。我が國が宏遠なる肇國の精神を具現する爲に平素より十分なる國防力を具備するの要は申すまでもない所であるが、かゝる國際對立時代に

處しては特に實力強化の要を感じる次第である。

而して、現代に於て國防力を形成するものは實に軍備のみではない。軍備、經濟、思想其他物的に心的に發揮せらるゝ總べての力が參與することに依て國防力は形成せられるのである。即ち國防力は國家の實力そのものとも言ふべきであつて、國防力即ち國力とも謂はるべきであらう。軍が内治、思想等に就き深き關心を有するの所以も亦實に此處に存するのであつて、國家の總べての力を培養發揮し之が一體的發揚に依て自信ある國防力を構成することは刻下の情勢に於て眞に緊要のことである。

我が國軍備の國防に對する地位

抑々軍備は全國防力の中に於て武力としての一要素たるものであるが故に、國際關係に萬一の事態を生ずる場合、其發動に依て國防を全うせしむるの役割を有することは贅言を要せざる所であらう。併し乍ら、此の如きは軍備の國防に對する役割の寧ろ一部分に過ぎぬのであつて、更に大なる役割が平時其發動せざる形に於て爲されあることを銘記せねばならぬ。即ち國家間に於て相互主張の相觸るるものを生じ其解決が先づ外交交渉に求めらるゝとき、軍備に自信無き國は交渉決裂の場合を憂慮するが故に正義の主張と雖之を最後迄強硬に貫き得ぬ事情に逢著するに反し、自信ある軍備を有する國は其軍備を有するの事實のみに依て既に所謂沈黙の威力を發揮し、外交交渉に於て堂々たる主張を爲

し得るは勿論、外交折衝にも及ばずして其國の主張を貫くことさへも出来るであらう。従て軍備は萬一の場合に於て其力を發動するのみならず、平時に於ても亦其發動せざる形に於て隱然能く大なる影響力を作用し得るものであつて、實に軍備は平戰何れの場合に於ても國防を支持する重大なる力であると謂ふべきである。

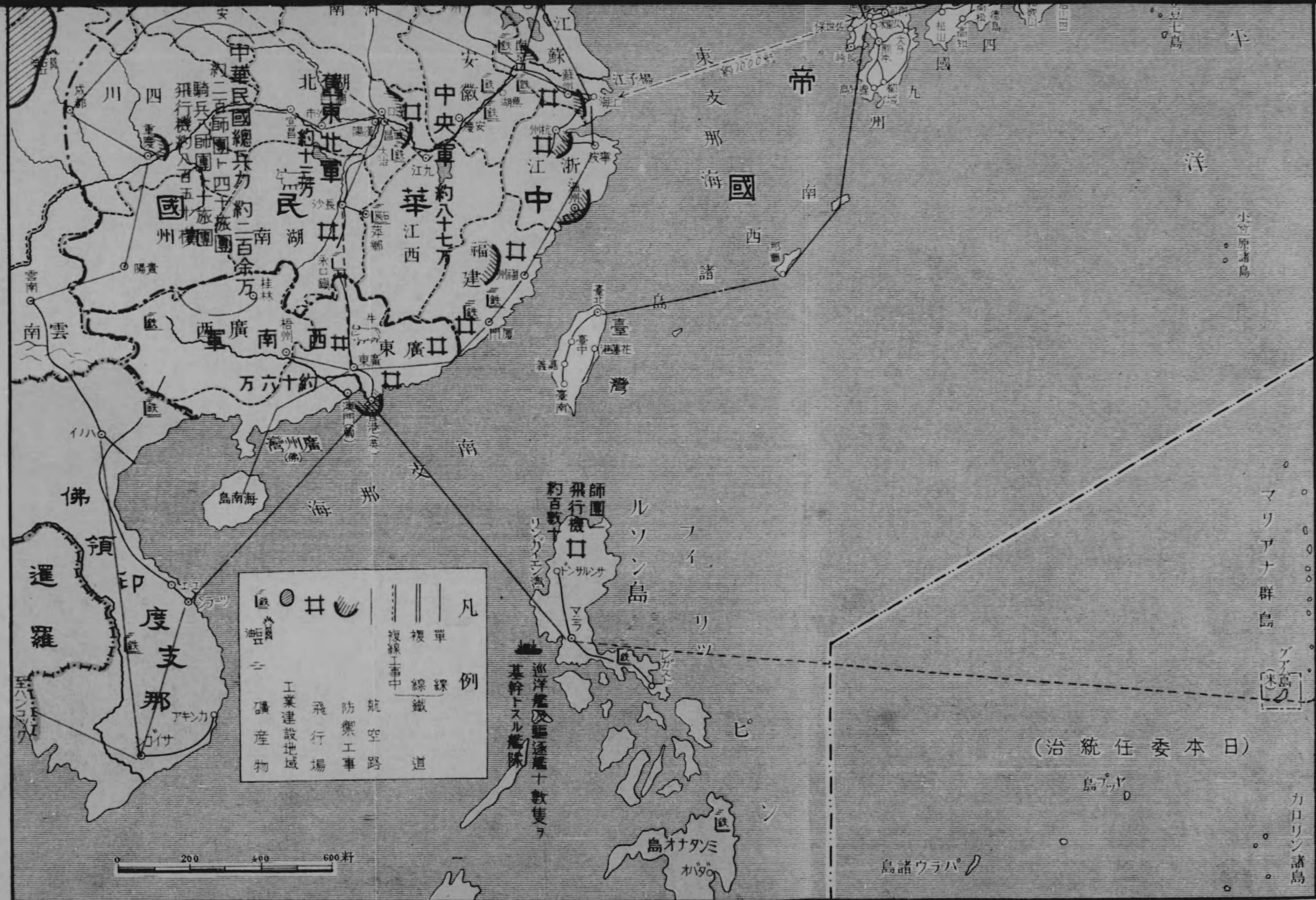
尙此處に一言したきは眞の平和希求と軍備との關係である。所謂平和論者は軍備を以て平和を阻止するものとするも、是、理の本末を顛倒せるものであつて、軍備在るが故に平和の至らざるにあらず、眞の平和至らざるが故に自ら軍備の必要を生じて居るのである。否、現在の世界は軍備の存在を以て辛うじて目前の平和を維持して居ると云ふやうな實情に在るのではないか。然るに現在の世界情勢に於て此現實の状態を輕視し、所謂理想平和を空想的に希求するの餘り、之に達する過程を考慮せずして觀念的に一舉其境地に飛躍せんとし、本末を無視して平和の爲に軍備を撤廢せよなどと論ずるが如きは眞に危険なる議論と謂はざるを得ない。勿論軍備に依つて平和を維持することは吾人の理想と相距ること遠しと雖、人類文化の現在の境地と現實の國際情勢に處しては又實に止むを得ざる必要なのである。

然り而して此處に尙一段の考究を加ふべきは、世界平和なる語の解釋に就てである。抑々現今歐米

に於ける二三の強國は世界の大部分に勢力を振ひ、之が現状維持を以て世界平和の維持なりと觀念し、他の國家又は民族が生くる爲の現状打開を以て平和の攪亂なりと宣傳して居るやうであるが、此の如き專斷なる平和の解釋は果して正當なるものであらうか。吾人は斷じて否と答へねばならぬ。二三の國々に依て其等の國々に都合よく歪められ他の諸國諸民族の上を顧慮せざる平和の解釋は今や改められねばならぬ時機に到達した。肇國の精神を奉じて皇道を宣布し誤れる平和思想を啓發是正しく世界全人類の福祉を招來すべき我が國防の世界的意義は此時に方りてや愈々燦然として光を放つべく、我が國軍備の皇道的使命も亦實に此處に重大なる意義を有するのである。

今後の難局の打開

非常時を高唱するの所以は國民をして其幻影に怯ぢしむるものでは斷じてない、世界的情勢を正確に認識し心の用意と物の準備とを整へて襲ひ來る難局を未然に克服せんとするに在ること多言を要せざる所である。見よ、滿洲事變以來數年に互る難局は、昭々たる 御稜威の下非常時を意識せる國民の協力一致に依て逐次に打開されて來たではないか。實に非常時に對する用意と覺悟とが事前に難局を克服したのである。而も世界的情勢は愈々混沌たるものあり、殊に現状維持的諸國の平和觀にして改められざる限り正義日本に對する壓迫は依然として續けられるものと見ねばならぬ。此機に方つて



凡	單線	例
	複線	鐵道
	複線	航空路
	複線	防禦工事
	複線	飛行場
	複線	工業建設地域
	複線	礦産物

0 200 400 600 軒

(治統任委本日)

島ヲ

カリリン諸島

島諸ウラパ

至ハワイ

マリアナ群島

グアム島

カリリン諸島

島諸ウラパ

ルソン島

島オナタミ

巡洋艦及驅逐艦十數隻ヲ
基幹トスル艦隊

飛行機約百數十機
師團數

約六十萬

中央軍約八十七萬

中華民國總兵力約二百餘萬

帝

友那海國

國

西

諸

島

灣

南

海

州

島

諸

島

諸

島

諸

島

昭和十一年十一月一日印刷
昭和十一年十一月五日發行

陸軍省新聞班

(日本愛社社誌)

